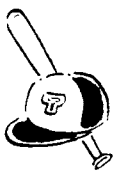
「銀婚式」を迎える日系人野球連盟

宮島幸男



「日系人野球連盟」――最近はあまり聞かなくなった名前ですが、一昔前までは毎週その試合結果が新聞に出たものでした。

今年の春先、創立二十五周年記念としてのオールドタイマーと現役との親善試合を計画したいとの声が現役組から出て来たとのことです。

この話を聞いた時、正直言って日系人野球連盟が今も活動を続けていることさえも忘れてしまっていました。それが、いつの間にか、夫婦に例えるなら「銀婚式」を迎える年数になることを知って、一昔、二昔前を懐かしく思い出すと同時に、二十五年という年輪の重みを意識せずにはいられません。

日本よりカナダへの戦後の移住が再開され、トロントへやって来た仲間達の間で「野球をやりたい」という声が出たのはごく自然な現象であったと思います。今ほどにゴルフが一般化していたわけではなく、独身男性の行動範囲は限られたものでした。とにかく何かをやりたかったのです。身体を動かす場が欲しかったのでした。

一九六八年の秋、数人が集まって準備が行われ、記念すべき第一試合のプレイボールが宣せられたのは翌一九六九年の五月でした。もちろん、その時点でその野球が二十五年間以上続くであろうことは誰一人思いもしませんでした。もしわかっていたなら、その時に投じられた第一球の記念ボールを大事に保存しておくべきだったと今になって残念でなりません。

新移住者、帰加二世を中心に集まった四十数名の選手を四つのチームに分け、五月から九月までの日曜日、トロントで野球をやれることの素晴らしさを楽しんだことは、そのこと自体、大きな意味を持つものと思います。

当初、新移住者を中心に進められていた野球連盟の運営も八〇年代も半ばになるとカナダ生まれの三世、新移住者達の二世の人達へと移行していきました。それに、常に側面よりご援助していただいた一世、二世、およびスポンサーの方々によるトロント日系社会の連係プレイが、二十五年間野球連盟が継続することのできた一番の原動力であると思います。

▲1978年トロントの日韓親善野球大会に出場した日本人選抜チームの顔ぶれ

とがいまだに昨日のことのように思い出されます。それ以後、一度でも一緒に野球をやった選手は多分、数百人を超えるものと思われます。

その会の活動内容のいかんを問わず、一つの団体が二十五年間継続されることは、大変なことだと思います。

野球連盟の活動資金集めの一方法として発案され、そして実行された「トロント紅白歌合戦」が一九七七年の第一回より数えて、昨年の暮れには第十五回を重ねました。これもまた、トロント日系社会のチームワークが実を結んだ結果といえると思います。

野球連盟が結成された頃、以前よりカナダに住まわれていた皆さんは、それぞれに生活基盤、活動範囲をすでに持っておられました。そういう中に新しく新移住者を迎え入れて下さり、一緒になって「紅白歌合戦」という一つの目的に向かって行動を共にすることにより、お互いの理解を深め、一つの和を作り上げて行ったものと思います。「紅白歌合戦」が日系社会の中にしっかりと根をおろしたのはこのような事情によるものだったと思います。

「創立二十五周年祝賀行事準備委員会」なるものが設立され、いくつかの行事が計画されていると聞いています。私も今からその行事に参加できることを楽しみにしている一人です。昔の野球仲間に会えるということが嬉しいのです。中には二十年ぶりに再会出来る人もいるのではと期待しています。

現役選手を引退して以来、野球場にはすっかり足が遠のいているものですから、このようなことをいうのは身勝手とは思いますが、日系人野球連盟は、この先もずっと活動を続けていっていただけることを願わずにはいられません。

〈筆者は現在シカゴ在住〉